

インタビュー 阿部知子衆議院議員に聞く 暴走する安倍政権の退陣を！

10月29日、衆議院第一議員会館にて立憲民主党の阿部知子さんにお話を伺いました。

少数野党として安倍政治とどう対峙するのか

直接の答えになるかどうか分かりませんが、まずは政治がどういうときに変わるか、という事です。もちろん、基本的には選挙という国民の選択に基づいて変わるわけですが、例えば昔、「自社さ政権」というのがありましたね。おそらく当時、自民党と社会党が政権を組むなんてことは誰も予想していなかった。



あと付けて言えば、いろいろな事情はあげられます。自民党は何が何でも政権に戻りたかった。社会党は被爆者問題とか水俣とか、戦後一貫して取り組んできた問題に一定の成果を出したいと思っていた。さきがけの一番の課題は財政規律問題だったのでしょうが、歴史認識とか平和問題でも自民党とは別の軸を立てる必要があると考えていた。底流を流れる内外の情勢や事情が熟し、政治の主体、政党といってもいいしある種の国民意識かも知れません。それが何かグシャグシャグシャと融合して（笑）何かポツと生まれるようなことが政治の世界にはあると私は思うんですね。

何を言いたいのかというと、例えば今の立憲民主党がこのまま同心円状に広がって、あるいはバオバブの木のようにな（笑）ドンドコドンドコ大きくなって、政権交代を果たすということでは多分ないだろうと私は思っています。生まれて1年目の立憲民主党は正直なところ今はひ弱だし、日常的な活動にしてもまだ何かをやれているわけでもない。98年の参議院選挙でご縁があっ

て政治家として私が最初に所属した社民党は、例えば基地でも原発でも憲法でも女性の人権でも、やっぱり活動を積み重ねてきた政党なんです。いまの立憲民主党が掲げる草の根民主主義にしてもまだまだ言葉だけの段階で、これから中身を作っていかなければいけない。まず次の統一地方選挙で地方議員を生んでいこうと。支持率はいま確かに下がっているけれど、そうして生まれた地方議員が日々どんな活動を実践できるかに今後がかかっていると私は思います。

ただ一方で、そういう自分たち自身が今やるべきことに加え、もう少し俯瞰して物事を大きく見る目も政治には必要なんです。それは安全保障の問題かも知れないし、消費税とか改憲かも知れないけど、そういう様々なテーマと国民の思いが干渉し合いながら政治の選択で生まれていくものだと思うんですね。だから少数野党でどうするよって言われても、それだけではいよって正直なところ思うんです。

いまは間違いなく安倍政権の終わりの始まりで、末期症状を呈しています。それは第4次安倍内閣のメンバーを見てもわかる。問題のあった人がゾンビ（笑）のように息を吹き返し、もう明らかに人材もいない。野党がいま一歩突っ込み切れていないと言われるのも事実だけれども、私たちは行政監視として、モリカケだ、政治とカネだと、もろもろの不祥事を追及しています。しかしそれとはもともと違う大きな状況の変化、これは人頼みとか外

部頼みという意味ではなくて、例えば朝鮮半島情勢をめぐる外交安全保障問題にせよ、憲法改正問題にせよ、何か政治の下部構造がいま大きく変わりつつある気がしています。そうした構造の変化をビビッドに感じ取り、備えることも政治家の使命だと思っています。

安倍改憲と国民の反撃

安倍政権は自衛隊を明記して改憲をすると言っていますよね。世論調査でも、改憲についてイエスとノーがほぼ半々と出ている。でも憲法9条は、武力は行使しない、陸海空軍は持たない、国の交戦権は認めない、という究極の非軍事国家の象徴的存在です。個別的自衛権であれ、集団的自衛権であれ、自衛隊を明記するということは、自衛隊を軍事力として認め位置づけるといことです。個別的自衛権は良い軍事力(笑)だから、自分たちの国土が攻撃されたときは使ってもいいんだと。でもよくよく考えれば、良い軍事力と悪い軍事力、良い自衛隊と悪い自衛隊とを分ける基準もないなあ、って国民は気がつくと思う。私は国民の賢さを信じていますし、自衛隊を個別的自衛権のみに限定する改正にも反対です。

だから改憲をやるならやってごらん、と私は本当に思いますよ。いま議論になっている国民投票法のマスメディア規制については、お金と量にものを言わせて国民を誘導し考える余地を奪う可能性があるから規制は絶対に必

要です。そのうえで、私は改憲について国民の議論と選択をどうやって掘り起こすか、という戦い方があっていいと思う。

戦後70何年たって、戦争経験者も高齢期を迎え自分の生が終わろうとするいま、あの戦争の悲惨さとか非人間性とか国民が払った犠牲とかアジアの人たちを塗炭の苦しみに追いやったこととかを語り始めています。テレビなどでも、靴磨きをしたり孤児院に無理やり収容された戦争孤児の話とか、ペリリュー島での激戦を記録した米軍のフィルムとか、戦争で精神障害をきたしPTSDを発症した多くの兵士たちの記録とか、中国大陸からの帰還兵が治療という名で国府台の精神病院に収容され、敗戦とともにそのカルテの破棄命令が出された時にドラム缶に入れて保存した医師たちの話とか。今ならばまだ戦争の記憶が人びとの中に受け継がれている。安倍政権は自分が総理である内に改憲をやりたいと焦っている。しかし焦れば焦るほど、いま言っておかなければいけないという思いを抱く人たちの行動を呼び覚ますと思います。

新しい安全保障論議を

大変残念なことに、今の政治家は私も含めて近現代史を知らない。国会議員もすでに殆どが戦後生まれで、戦後の教育は全くと言っていいほど日本の近現代史を教えていない。今年も明治150年というけど、明治150年とは何であったのかを私たちは学んでいな

い。今の政治家に大事なことは、この近現代を政治という目でもう一度見直してみる視点です。

今やらなくてはいけないことは安全保障論議です。今の自衛隊は、朝鮮戦争から警察予備隊、保安隊を経て生まれた。しかし朝鮮戦争が終わりサンフランシスコ講和条約を締結した後も日本は自衛隊という名の「フォース」を維持した。しかし日本がフォースを持つことについての憲法と米国からの要求に対して、時の自民党政権は極めて巧妙な手練手を駆使して(笑)抑制的に対応してきたんです。最後の抑制を取ったのが新安保です。もういいんだと、米軍と一緒に行くんだと、武力行使もオーケーなんだと、そうでなきゃ日本は守れないんだって、もう毒を食らわば皿までもだと多分思ったわけですよ。

でも今変えるべきは憲法じゃなくて、安全保障の姿です。見果てぬ夢かも知れないけれど、私はこの北東アジア地域に集団安全保障、要するにNATOみたいな地域安全保障体制があつていいと思っています。ドイツ軍はNATOの中で、NATOの命令でしか動けないわけですよ。六カ国協議すらできない中で日本がフォースを持つたら、このフォースは日本とアメリカの政治によって動いてしまうわけですよ。私たちはいま憲法いじりをしていく場合ではなく、近隣諸国とどんな信頼関係と外交安全保障体制を作るのかという論議をすることが必要なんです。裏にある安全保障



の状況が憲法を動かしているんです。だ
けど立憲民主
党も含めて今
の政治は、そ
ういう議論へ
の切り替えが
できないとい
る。

沖縄問題も
その一環にあ
る。安全保障

論からいくと、グアムなど広くアジア太平洋に展開していくアメリカにとって、本当は沖縄に基地はいらない。むしろ基地を欲しているのは、アメリカと共依存みたいな関係にある日本政府。今度沖縄で住民投票も行なわれるでしょうけど、沖縄のことを沖縄を抜きに決めるな、と。もちろん安倍政権は必死になつてしゃにむに抑え込むでしょうけど、抑え込めば込むほど沖縄の人たちの中にアイデンティティとでもいうべき意識、自分たちは違う生き方でも生きられるんじゃないかっていう思いが生まれて来るし、それは本土の意識にも影響を及ぼすと思いますね。

野党共闘について

安倍政権の暴走を止めてくれ、という国民の期待は重々承知していますし、野党がバラ

バラであつていいとも思わないけれど、ただ単に数だけ集めれば何かができるっていうものでもない。私はもともと野党共闘ありきではないんです。野党と与党を対立軸にしては限り、さっきの自社政権みたいなことは起らない。野党共闘という言葉には、野党が寄り集まって膨れ上がって、反対勢力が大きくなつていくというさっきの組織論の匂いがして、私は好きじゃないの。言うなら国民共闘と言えど。私が初めて訪れた社民党の県連合事務所には浅沼稲次郎さんの大きなパネルが飾ってありました。彼が言っていたのは国民共闘です。農業者も勤労者も生活者も炭鉱労働者も工場労働者もおしゃれもじを掲げた主婦の運動も一緒になつた国民政党になろうって。でも政党の常として誰が金を出し、誰が日常活動を担うかということがあつて、社会党は戦後の流れの中でどんどん労働運動に依拠せざるを得なくなつて、戦闘的にはなつたけど片翼になつて幅広さが失われた。

その後、勤労者、労働者はもちろん大事だけれども、もう少し広がりが必要ならば今の時代にフィットしないよつていうので、土井さんが市民との絆を掲げて出て来た。土井さんはその前にマドンナブームというのを打ち出していたけど、その後社民党になつて、辻元さんとか福島さんとか中川智子さんとかが誕生した。彼女たちは労働運動出身じゃないわけですよ。そういうひと時代があつて、でもまたやつぱりいろんな意味でそこだけでも足

りなくて(笑)。

この前の参議院選挙の一人区の勝利も野党共闘の成果だというけど、それに加えて農村をないがしろにして売り渡そうというPPPに反対する自民党支持者も含めた東北地方の有権者の意思が大きいですよ。本当に政治を変革しようと思つたら、その時の政治の流れと国民の中に起る意識の変化に絶えず敏感じゃなくちゃいけないので、野党共闘というタガをはめることが却つてマイナスになることもあると私は思っているんです。最初から固く身構えていては政治は変わらないんです。より多くの声をどうやって形にし、どうやって政党自身も変わり、という柔軟性がある政党にしたい。今そこにある問題に何を思い、どういう方向を選び取りたいかという国民の思いと共にありたい、と思います。

子どもこそが社会の鏡

今の日本の最大の危機は少子高齢者社会と言われています。高齢化はいいことなんですよ、だつて平和の配当なんだから。問題は政策の誤りで少子化してしまつたことです。今の少子化は自然減ではありません。1985年の労働者派遣法をきっかけに、どんどん若い人たちを非正規雇用の立場に置いてきた。これは明らかに政策のミスです。だつて、派遣で働いていたら子どもなんて諦めてしまふ。挙句の果てに今、子どもの数が減るだけではなくて、日本の社会では子どもの虐待、子ども

もの自殺が増加している。子どもの自殺がこんなに多い国はないんです。なぜ子どもは死を選ぶか、もつとも自分を頼りにしてくれてはいるはずのわが子を、なぜ親御さんは殺めたり殴ったりするのか。次世代の子どもをこれだけ悲惨な状況に置いている社会に未来はない、と思います。

私はもともと小児科医です。子どもは「未来」だし、社会を映す「鏡」です。いま目の前で倒れていく子どもたちは、危険を知らせる現代の炭鉱の中のカナリアです。結愛ちゃんの事件（編注・東京都目黒区の船戸結愛ちゃん〈当時5歳〉が虐待で死亡）で、虐待を受けた子どもの言葉を聞いてみなさんも衝撃を受けたと思います。でも小児科医として私は、子どもがどんなにか親が好きで、それも虐待している親を好きなんですよ、どんなにかその親に愛されたいと思っているか、さんざん見聞きしてきました。もう、切ないなんでもんじゃないですよ。親と子が対等な立場なら別ですよ。でも子どもが親に「私が悪かった、もつと勉強するからね」って、「もう、あほみたいに遊ばないから」って、違うでしょ。遊ぶことって子どもの最大の成長の糧でしょ？ そう言わせているのは私たちの社会なのだ、ということに気がつかない恐ろしさ。子どもの貧困とは、すなわち親の貧困です。非正規でしか働けず、あるいは離婚をして、子どもと向きあう時間を持ってない母親。貧困の問題だけでなく、お母さんたちの生活環境から来るノイロー

ゼやマタニティブルーだって山ほどある。でも、まず第一は働き方の問題。非正規労働の問題の是正はもちろん、労働時間についても家事労働をネグレクトしない、子どもという時間をネグレクトしない。だって子どもは人としての当たり前の反応や愛着など大事なものを、人との触れ合いから学ぶんです。一方で今の社会は、子どもを窮屈な型にはめたり詰め込み勉強させたり、とにかく成績が良ければなんか未来があるような（笑）、そういう幻想で子どもを追いつけています。いま子どもはホントに心が不自由な環境で生きています。

『赤い鳥』

ここでいま私は、夏目漱石門下の文学者の鈴木三重吉が1918年に創刊した童話と童謡の児童雑誌『赤い鳥』の紹介に力を入れています。ちょうど今年に『赤い鳥』創刊から百年なんです。『赤い鳥』は大正デモクラシー

の時代に生まれて、日中戦争の前まで発行されてきました。第一次世界大戦が終わって世界の人々が国際連盟を作って世界平和に向かうとしていた時、子どもたちにもつと子どもの心を生かさんとさせる童話や童謡をプレゼントしようとした運動です。いま本当に大事なことは、子どもの心を私たちがどう自らの鏡とするかです。子どもは未来の社会を決めていく存在です。

ノルウェーで2000年経って憲法を改正しました。それは子どもの権利条約をどう憲法に取り入れるか、という改正です。ノルウェーでは毎年、子どもの自己決定権や意見表明権など、条約の定める子どもの権利がどこまで達成されたかを政策目標に掲げています。ドイツもバイオテックノロジーの発達が生んだ生命倫理の問題を憲法に反映させるための改正をしました。そういう憲法改正ならオーケーですよ。社会の根本的な価値観や理念の進歩を反映させるために憲法の改定が必要であるならばいくらでもやりたいですよ。

そういう社会だって、作ろうと思えば作れるんです。いま本当に思うのは、こんなに子どもが不幸でないだろうか、ということですよ。子どもが持つ想像力とか、希望とかが次の社会を、世界を作って行くんですよ。そしてそういう時間が大人にもあったらいい、と私は夢を描いています。それがいま私が一番やりたいこと、話したかったことです。

（まとめ・野澤信一写真撮影・北原博子／本会事務局）

